

NPO学校支援協議会セミナー「浅野の東大実績は一日にしてならず」

日時：2021年6月15日（火）16：00～17：30

講師：淡路 雅夫（浅野中学・高等学校 元校長）、古梶 裕之（浅野中学・高等学校 校長）

司会：富田 亮（元『進学通信』編集長）

富田

今日は浅野の東大合格実績が栄光学園を上回ったという表題になっておりますけれども、もともと神奈川男子御三家の一角を成す学校として、もとより赫々たる合格実績をお持ちです。今年は東大合格実績が48名、去年が39名ですので10名近く東大合格実績を上げていますので、東大合格実績が伸びたことについて話していただきたいと思います。

まず淡路先生に長年、浅野の校長をやっていたらっしゃって、学校の教育方針や姿勢を伺いたいと思います。先生によると、「生徒を観察して、その観察の結果を、教員が情報を共有して育てる」という姿勢だということですので、そのあたりの学校の姿勢についてお話をお願いします。

淡路

こんにちは淡路です。本来であれば古梶現校長一人で対応してもらっていいと思ったのですが、浅野は、けっして東大あるいは難関大学合格を目指して教育している学校ではない、生徒が一步一步階段を上がっていく。生徒を育てること、人育ての私学という浅野について話してほしいということなので参加させて頂きました。よろしくお願いします。

私は40年近く浅野の教育に関わる中で、先輩の先生方から「人育てというのは促成栽培できない」「常に生徒の観察を」と言われてきました。

私も若い頃、先輩の先生に「どう教育したら良いですか」と、若さゆえ短絡的な答えを求めて質問することがありました。そのたびに、「生徒にはそれぞれの特徴がある。そしてそれぞれの事情、背景がある。そのうえで生活したり学習したりしている。だから何を指導するのかは生徒を観察すればわかる。「課題は自分の頭の上であり、その答えも足元にある」ということを言われて教員生活をしてきました。

校長職に就く前からも古梶先生と一緒に担任を持ったり、学年主任として現場の先生をサポートしてもらいました。年々生徒たちが、親からやらされている、つまり、親から指示されて浅野に合格してきたという傾向が増加してきました。そうした生徒たちは、入学してから自ら学ぶということがなかなかできない。そうした生徒に対して先生方が従来どおり、どんなに一生懸命研修や教材研究をして子どもたちに授業をしても、乖離が出てきてしまうようになったのです。

一番の課題は、生徒が変わってきているということなのです。つまり、生徒をよく見て、生徒に合わせて伸ばしていくということが必要になってくるんです。生徒の変化の中でとても重要なのは、人間関係が脆弱になってきたということです。そこで、生徒同士のチームワーク、みんなで中高6

年間を過ごして、最後はみんなで目標を実現させていくという「団体戦」ということが課題になっていく。行事の意味を理解させて、その枠の中で自由に活動させてきました。さらに、生活面では親離れをさせなければならない。保護者会でも生徒が自由に親の手を離れて自律するように学校では育てているのだから協力してくださいと言ってきました。なかなか1年や2年ではできないけど、毎年の積み重ねがあって、少しずつ親の不安を取り除いて、学校に預けてくれるようにしていく、そういうことがまず1つある。

そのためには、たまたまハード面の施設で、学校の学年のフロアには、これは古梶先生に現状含めて聞きたいと思うんですが、学年のフロア中央に学年の職員室があって、担任はもちろん講師の先生も常駐していて。授業から戻ってくる先生たちから生徒の様子が入ってくる。そして、先生方も生徒が来室することを歓迎する雰囲気があった。

古梶先生が生徒とアニメや映画の話をしている場面も見てきました。個々の先生方も生徒との距離が短かった。ここは古梶先生からも話あるかと思います。

もう1つ。浅野の入試は3日校。つまり1日入試や2日入試がうまくいかなかった子どもが入学してくる。メンタルの面で、あそこの学校が不合格だったという入学試験が上手くいかなかったメンタルを持った集団が中1なんです。その意識を変えなければ思いました。よく受験の合格がゴールではないよと。なんのための学校生活にするのかということ。入り口でそういう関わりをして、さらに先生が生徒の学力をきめ細かに対応してました。生徒の足りないところは補充する。小テストなどもする。問題解いたらその日のうちに返す教員。古梶先生もそういうハードなことをしてましたね。

浅野に入ってくる生徒の中には、知識はあるけど基礎力がない生徒も多い。また、勉強の仕方がわかってない生徒も少なくないんです。そういう生徒は、だんだん成績が上がらなくなっていく。そういう生徒も早めに先生がケアする。

さらに、ほぼ全員参加するクラブの目的はクラブの活動そのものが目的ではなくて、クラブ活動の本質、つまりにクラブ活動を通して他人を知る、自分を知る。また行事も、それを楽しむだけではなく人間関係づくりや、みんなで取り組んだことが2年後3年後にどんな成果になるのかということがある。

こうした考え方の背景には、浅野学園の創設者である總一郎翁が、富山から出てきて小学校も出ていないんですよ。總一郎翁が東京へ出てきて何をしたか。社会で必要とされている仕事を自分で気づいて実践した。そして、それが近代事業になった。気づいても実践する能力は自分一人では持っていないわけなんですよ。總一郎の人間関係が出てくる。大学教授とか、同じ実業家とか、官の仕事を受けるには今話題の渋沢栄一とか、資金面では安田銀行の安田善次郎とか。いわゆる自律という考え方も、何でも自分でやるだけでなく、他者の持っている力を借りられる人間づくりということが、浅野總一郎の学校をつくった背景にあるんです。自分の力が足りなければそれを持っている人の力を借りられる人間を育てることが大事なんです。九転十起つていうと「転ばせないで」と言われることもあるのだけれど、それだけではないんです。

ということでまずは学園の指導の方向性についてはわかっていただけじゃないかと思います。

富田

そういったバックボーンに基づいて、いまどういう教育が行われているのかについて古梶先生からお話いただけるでしょうか。

古梶

どういうふうにしたら東大に合格できるかって話を聴きたいんですが、そんなものがあればこっちが聞きたいなって思っています。特効薬なんてものはないのだと思うんですよね。目の前の生徒に対してきちんと見てあげて、全体的に今どういう状態にあって、目標がここだから、どういう指導をしてあげたらいいのかってことをきちっと見てあげることしかないんじゃないかな。だからもう一回立ち返ってアタリマエのことをきちっと一つ一ついねいにやっていくってことしかない。そういう学校なのだろうと思っています。

去年コロナで休校して、ちょうど一年くらい前の6月に学校再開しましたが、高3生は実はもう会議室とか卓球場とか広い教室を開放して早い時期から6時間授業をスタートしていたんですよ。で休校の2カ月間どういう指導をしていたかっていうと、具体的にここが模擬試験の結果として弱いんだからここをやりなさいって具体的に指示を出していたって聞いています。

先ほど淡路先生もおっしゃっていましたが、勉強しろっていうのはすごく簡単なことなんですけど、それだけじゃなくて、もっと具体的に何をどうやらなければならないのかを示してあげることが大事なんじゃないかなと。

例えば東大の問題を解説するにしても、彼らが一番関心があるのって何かって言ったら、一行目がどう書けるかっていうことなんです。一行目をどう書くか。どうゆうふうに考えたらその一行目が書けるのか、問題文のどこに着目すれば書けるのか、という点に関心があるので、授業のときにそのものすごく重要な一行目を、じゃあ解説やるよってさらさらって書いて終わっちゃうと多分台無しになっちゃうんだろうなと思う。だから何をどう考えていかなければならないのか。世の中には解答を覚えていけばできるようになるって先生もいらっしゃいますが、覚えることが大事なんじゃなくて、なんでどうして解けるようになるのかっていうのを常に考えていけることが大事なんじゃないかなって常に思っています。

だから今年の中学入試問題で本校は、円周率が3より大きいことを証明しなさいって問題を出しています。今学校説明会でよく使わせてもらっている話題なのですが、ほしい生徒は3.14なんてことは知っているわけで、ただ、肌感覚でほんとに3.14を確かめたことがあるのか。そういう生徒がほしいと思っています。実際に茶筒でもガムテープでもいいんだけど、円の長さと、直径の長さを測ったことがあって、それを計算してみたことがある、そういうふうにできることが大事なんだと思う。なんでそうなるの？っていうのを大事にする授業をしてほしいって先生方には言っています。

また、生徒に憧れられるような先生になってほしいと先生には常に言っています。あの先生みたいにきれいに発音したいとか、あの先生みたいに知識がいっぱいほしい、あの先生のようにきれいに走りたいとか、そういうことってものすごく大事だと思うので。教わっている先生に夢が持てなか

ったら、生徒がその科目に対して夢を持ってなくなっちゃうんじゃないかな、と思います。教員の仕事ってすごく重たいと思うんですけど、子どもたちに教えている学問に対する楽しさとか奥深さとか教えなきゃならないって思う。その中で彼らを感じてくれること。通り一遍の授業ではなく物事の本質を考える授業をしてほしいと先生方には求めているし。そういう学校だと思っています。

富田

定着度を確実にするのに、わからせたつもり、教えたつもりにならないように、小テストをこまめにやっているという話が淡路先生から出てきましたけど、今も変わらずですか。

古梶

そうですね。宿題を出したり小テストをやったり。こないだも中1の先生に聞いたら、出してくれない生徒もいるんで放課後残して出させてから下校させましたって言っていました。どこまでも浅野の先生たちって追いかけていきます。

ある先生は不合格の生徒がいなくなるまで追試をやるから「今日は決勝戦です」なんて言って控え室を飛び出していく先生もいます。

富田

先日伺ったお話ですと、先生が入れ替わって世代交代が進んでることかなって思ったんですけど。昔の先生は高校文化が根強いというか、生徒のことを一個の人格として尊重するあまり過度に細かい指導をしないのが昔の進学校は強いってのがあったんですけど。

古梶

それは学校によると思いますね。入ってくる生徒の、言葉は悪いですけど質というか、学力とか高い学校で、ほっといてもやるっていう学校はたぶん放っていると思います。ただ生徒の数がぐっと減ってきているってことは、そういうレベルにいる生徒も減ってきていると考えています。いままではそういうことをやらなかった学校もそういうことをやらなきゃならなくなってきているんじゃないか。逆に今までやってこなかったからやり方がわかんないって学校もあると思う。でも浅野の場合は、さっき淡路先生がおっしゃっていましたが、勉強の仕方、具体的にこうだよって教えてあげないと、やる気があってもできないって生徒が多いように思うので、そここのところはいていねいに、ノートの書き方から、たとえばイコールは縦に揃えて書くとか、英語の先生も毎日毎日ノート集めてスペルのチェックをすとか地道なことをほんとにやっていますよ。

富田

そういうのは若い先生のほうがやるんですか？

古梶

学校としてそういうことやっているの、年齢に関係なくやっていますが、若い先生ほどICTスキルが相当高いので、まあそういう飛び道具っていうか。そうゆうのを使って無駄なく授業展開している部分あります。各教室にプロジェクターもついているんで例えば英文でも昔みたいに書く必要はないので、そういう部分を省略できる分濃厚だったり、毎回テストでListeningやったり。昔は設備なかったからできなかったこともできるようになっていますね。あの手この手でいろんなアプローチできる部分もある。

富田

コロナのオンライン授業も含めて前と変わってきてる部分を教えてください。

古梶

オンラインだとやっぱり授業が進むんですって。やっぱり、生徒の表情見ないでできるんでサーっとできる。でもわかっているかどうかわかんない。実は学校再開したときに確認テストを実施したときに、今までみたことないような成績分布でした。つまり、すごくやった生徒とやらなかった生徒で分かれてしまった。ただ生徒としては何度も繰り返し授業が見れたことは良かったと言っていました。

先生の話を聞いてみると、生徒が「ん？」って表情をしたときに、あ、じゃあ、それでわかんないんだったらこの説明にしようとか、で生徒がのってくるのと脱線しちゃったりするので、それはそれで授業が進まないけど、それも大事かなって思いましたと話をしていました。あと動画を作る労力も相当です。

で、やっぱり対面授業の大切さ。生徒の表情をみないと、みたいなことに対して敏感になってきたかなと思います。

富田

そういう意味で、さっき淡路先生がおっしゃっていた人と人との関係が形作られるという面では当然オンラインより対面がいいなってことですよね。

古梶

そうですね。ライブ感っていうのは大切です。だいぶね。

富田

学校行事とかもそうですね。

古梶

そうですね。文化祭なんかもぜんぜん外部の人を呼べなかったの、保護者だけであとはライブ配信とか。体育祭も密になっちゃうんで、観客の数3分の1くらいしか入れられないんで、撮って後でビデオ配信って形にしました。

緊急事態宣言とかあったので部活動も3カ月くらいしかできなくて可愛そうだったな。でも生徒は偉いなって思ったんだけど、先生が悪いわけじゃないんでしょがないですよって笑ってくれたり、生徒たちも大人で理解してくれてるなって感じで感激しました。

富田

生徒さんたちがプログラムを組んで作ったとかって。

古梶

本校創立は1920年ですから100周年記念なので、生徒に1日あげるのイベント作ってねっというのを2年3年前に生徒に振って、その生徒達が当時中学3で、高2の6月にやったんですけど、ちょっとびっくりしましたね。オープニングのCG、タレントさんとの交渉、クイズ大会でクイズ王の井沢さん呼んできたのはスゴいなって驚きました。陰で生徒会本部の先生も動いていたけど、自分たちがやりたいってことを形にしたのってスゴいなって思って。行事に関してはもっともっと生徒の自由度を上げていきたいなって考えています。

富田

将来の大学入試のあり方を考えた場合に、非認知能力の部分、学習に対する意欲とか態度ってのは教科学習だけでは身につかないですよ、体験などでしか。そういった意味でも自由度を上げていくってことにはからんでくるんでしょうか。

古梶

そうですね。こんななっちゃったって経験してほしいですね。失敗してほしい。失敗することが悪いことではなくて、今でよかったなって思って、改善してほしい。勉強も一緒に、自分で振り返ってあのときのあれがだめだったなって反省して糧にできる子は浪人生でもすんなり（大学へ）入っていくっていうのはありますね。

富田

あの話していい内容かどうかはちょっと判断できないんですが、今年は浪人も少なかったってお話をお聞きして・・・

古梶

ああそうですね。はい。あの今年浪人生少なくて、なんでかっていうと、子どもたちがこういう世の中になっちゃったんで、もう一年こういう中で勉強するのは嫌だってことで。特に理系の子たちは地方の遠い学校まで受けに行っ、実は国公立大学の合格者も例年に比べるとえらい多くなっていて、だから大学に進学したいって部分はすごく大きいんだと思います。

富田

親御さんが1年の浪人生活に我慢できなくてさっさと合格させてしまうみたいな話もちらっとしてましたけど。

古梶

そうですね。最近は母親が耐えられなくてっていう傾向がありますね。前に担任持ったときに東大理Ⅲに現役で受かった生徒がいたんですね。その生徒が高2の面談のときにお母さんから「国公立の医学部には入ってほしいと思っているが、東大理Ⅲじゃなくてもいい。地方の医学部でもいいから現役で入ってほしい。だからあんまり子供を焚き付けないでほしい」って言われました。で次の日に生徒に聞いたら「僕は東大理Ⅲに行きたいです」って即答で、「じゃあ皆でサポートするからがんばろう」って。もう10秒で決着がついて。彼は自分で決めていたので、やっぱり男の子の決意って大事だと思う。彼も勇気あったなと思うのは、実はその前に東大理Ⅲに受かっているのって23年くらい前でした。で、その後、彼の合格を見た後輩が同じ学校で学んでいる先輩が行ったなら自分も、と続く生徒がでてきて挑戦してくれています。

浅野のパンフレットに載っていない文化というのが2つあります。一つはさきほどの淡路先生がおっしゃっていた控え室です。ここに担任の先生がいて、まあ朝HR終わって帰ってきて「自分のクラスのAくんはいつも元気なのに今日なんか朝おとなしくて、なんか事情を知っている先生いませんか」というと「あー、あいつ、きのう部活で下手打って落ち込んでいるだけだからすぐ元気になりますよ」とか、授業から帰ってきた先生が「なんとかくんはいつも宿題出すのに今日出してくれなかったんです」となると「じゃあ呼びに行っ、話聞いてみましようか」ってなったり。すぐに呼びに行けたりするんで。あと生徒から「ムカデがでました」とか「お弁当のはしを忘れました」とか、そんなことでも気軽に来れるので、精神的にも物理的にも距離が近いんです。

で、あともう一つが、これは保護者と本人の承諾を得た上でやっていますけど、大学の合格者は職員室の前に全部張り出しています。それを誰が一番楽しみに見に来るのかっていうと、部活動の後輩たちなんですよ。一緒に走っていた、ボールを投げている、蹴っていた先輩がどうなったかなって見に来る。でそれを中学1年から高校2年まで5年間ずっとくりかえしてくるので、こんどは自分たちがそこに名前載せたいなってなる。大学受験生の方も部活どうしようかなって頭がよぎって心が揺れる時もあるんだけど、そのときに、でも先輩最後までやって受かったよなってことが励ましになる。先輩たちもほらこうやってついてくるんだぞっていう、後輩たちへの無言のエールになる。

富田

高校になって自律して学習していくようになるまでは、中学段階ってのはやはりかなり細かい指導が必要なのかなって思うけど。

古梶

そうですね。試験の前には学習計画表とか。何をやるっていう時間割もそうですけど、具体的に何をやるのかを書かせてみるとか。こないだ中1のフロアには、「良いノート」っていうことで、生徒のノートがいくつかはってありました。見本として。そういうこともこまかく。だから勉強ってこういうふうにするんだよっていうのは中学の段階でかなり一生懸命細かく教えています。

富田

中学の段階では学校の授業だけで完結するってことを目指してる展開してるってことなんですけど。

古梶

具体的には中3で英検の2級っていうのは一つの目標になっていて、それに向けて基礎英語をやったりリピートクって行って自分で発音聞いて練習をして録音をして提出をして採点をしてもらうっていうことを繰り返すってこともやっています。そういうことの積み重ねで7割位は達成しています。

富田

そういうのは昔からやってたんですか淡路先生。

淡路

はい。今お話を聞いて、生徒を育てる指導が続いてるんだなということを実感しています。浅野の指導は、生徒も先生もお互いに学び合いの世界なんです。さっきのノートの話がそうですけど、友達はこういうふうにノートとっている。で自分には何がたりないのかと気づかせる。先生方も学年主任会という組織があって、学年主任が前の学年の指導を聞いていて、例えば、中1であれば中2中3の上の学年の指導の先取りっていうのができるんです。自分の学年にいま足りないのは何か気づき指導の流れができてくるのです。自分たちの学年の足りないところは常に意識して自分たちの学年の先生方の知恵を借りる。お互いの情報交換で学びあいができるんです。だからみんなが生徒を育てる。そういう雰囲気というか、教員の学びの環境は大きい。それが段階的に浅野の指導を引き上げてきたといえると思います。

私は、よく勝つことよりも負けないことを考えようって。「負けない意識」ということを浅野總一郎は訴えているのかな、それも「九転十起」の精神から学んだことだと考えています。学び合いの文化は浅野学園の特色です。卒業してからもそうですよ。

富田

先程も後輩が先輩の実績を見てってのはいわゆる団体戦としての大学受験ってことですよね。

淡路

そうですね。だから例えば慶應の理工を受ける生徒たちが自分が問題を解いてしまったら、まだの生徒がいれば教える。一人受かればひとり落ちるとというのが受験じゃないですか。でもそういうところに行事や部活を通して教え合う人間関係が生まれているのです。それとロール・プレイングです。男社会の良いところで、自分がこうありたいという、生き方については、先生と生徒がよく話し合っていたと思いますね。

富田

今もそういう伝統続いているんでしょうか。

古梶

基本的にはそうですね。受験勉強は辛いのでみんなで受かってこうって。高3のクラス編成も割と志望校別になっているので、結束も強くなっていくかなって。あと男の子ってプライドが高いんですよ。だから彼らの中で自分よりも成績いい子、同じ子、悪い子って分けて考えているんで、自分よりも成績悪い子が自分の知らない単語や化学式知っていたりすると「え！」ってビビる。だから底上げすると全体的に有効かなと。

富田

親離れが進んでないって話もあったけど、生徒が自分で受験校選んでくってのが本来なんですよ

古梶

学校の進学実績上げたいからここ受けてっていうことは一切ないです。自分の受けたいところ受けてって。センター失敗して東大足切りかなって生徒がいた。でもその生徒は落ちてもいいから受けたって言ったんです。頑張ったんだからって。結局、足切りにはかからなかったが合格できなかった。でもやるだけやったから慶應行きますって進学しました。

相談には乗るが最後に決めるのは自分です。

一番凄かった相談は、その子の夢は東大理Ⅲに行って医者になって宇宙飛行士になること。で慶應の医学部と東大理3受けたが不合格で、でも後期で東大受かって、でも後期の合格だと理Ⅲにはいけないんです。で、「先生受かりました、ついてはあした学校に相談行くので時間空けておいてく

ださい」って相談に来て「先生僕は東大行ったほうが良いでしょうか浪人がいいでしょうかって」で。で東大に行きなさいとアドバイスしました。結局理Ⅰに行ってアメリカの大学に行っているホンダでジェット飛行機を作っているんですけど。そんな彼も後輩のためにビデオレター送って頂戴ってお願いしたら、ほんとにこんなの撮っていいのっていう、飛行機作っているところまで会社の中を撮ってくれて送ってくれて。そういうつながりも良いなって思っています。

富田

理系のほうが多い印象ですが

古梶

理系のほうが多いですが僕が担任持った最後の2回は文系が多かったです。で文系のほうが多くても理系の合格者変わらなかったんで。最近はでも理系のほうが多いですよ。昔とそれほど変わらないですよ。

淡路

世の中の流れも影響するんじゃないですかね。

富田

コロナにあってどうですか医学部志向ってのは。医療ってリスクを取って取り組まなくてはならない分野になっていますよね

古梶

医学部志望は若干少なくなっていますね。わりと卒業生の話を聞くと救急救命にいたり産婦人科とか小児科とか、一般的に嫌がられるところに行く卒業生が多いように思います。やっぱりそれって校訓の愛ってあるんですけど。僕はその愛を奉仕、世に尽くすこと人に尽くすことって解釈しているんですよ。初代校長が行っていたこと。そういう精神がやっぱりあるのかなって感じるがあります。

富田

ただ単に上昇志向っていうか対外的にステータスの高い職業を目指すってことではないんですね。

古梶

そうですね。医学部目指すってなった時点で担任の先生とかがなんで医者になるのかって確認する。やっぱり扱うのは人の命なので、一步間違えると大変なことになるので、そこはしつこく確認していますね。

富田

まあどういう進路にすすむかは自分の判断になるわけでしょうけれど、やはり大きく見て社会のため人のために考えて進路を選ぶんでしょから、そういう面がやっぱり私学で中高6年間育てきてそういう考えが身につくってことなんですかね。

淡路

私が担任最後の時の話しですが、進路がなかなか決まらないという生徒がでてきましたね。どういうことかという、やりたいことがいくつもある。単純な学部選びではなく、ああいうこともこういうこともやりたいって。それでこれからはこういう生徒は増えるだろうなと思いました。生徒の考えを聞くと、医者にもなりたい経営者にもなりたい、音楽も美術も極めたいと。そういう人生の選択の多様性というのが浅野にも起こってきているなって感じました。古梶先生、最近はどうですか？

古梶

その当時実は美容師になりたいって生徒がいたんですよ。ほんとにやりたいのかどうかって話を聞いて、それでいま実際、表参道で美容師やっています。あの、親としてはこういう道をとっているのがあったけれど、大学ではなくこっちの道でって、そういう生徒もいましたね。

淡路

人生この先一本道ではなくなるから、先を見てね。その時、生徒にはまず優先順位を決めてごらん、と言ったら、生徒がまず、経営者の勉強をとということで経営学部に進学したい。次に医学へ。音楽もやりたいが、それは趣味でもいいということで決着しました。経営学部で学んだ後に医学部に移ってましたよ。やっぱり社会は変わってきたなって思いました。ますますそういう傾向は強くなっているのではないのでしょうか。

そういう変化の中で進路選択に影響を与えるのが、部活動などを通しての先輩や卒業生ですね。クラブの組織っていうか、もう、組織化進んでるでしょ。OBが計画的に来て指導したりとかして。

古梶

いまなかなかコロナの影響できなくなっていますけどけど、部活の夏合宿なんか先輩が来て、大学でこういうことだよとかこんな勉強しているよとか、そういう勉強したいのだったらこうだよって具体的に話してくれるので。昔からかわらず今もますますOBとの結束は強固になっていますね。

淡路

社会の第一線にいる保護者にも協力してもらって、皆で生徒を応援するのは変わらないね。

富田

そうしたことがこれまでなかった職業や進路に進んでいくことにつながっていくんでしょね。

淡路

そうですね。それが浅野がもう一つ階段をのぼることになるんでしょね。今のままでいいのではなくて、今の課題というか、生徒の抱えている問題を受け止めて支援してやると。それが勉強だけじゃなくてね。もともと中学の入り口で気づかせてモチベーションを高めてやると、特に、メンタル面で問題のあった生徒たちが6年間で生活改善して成果を出し、卒業後の社会でとっても元気ですよ。

富田

そういうところで浅野の精神的なタフネスってのがおそらく大学に進んでから、大学を卒業してから生きてくるってことなんでしょね。

古梶

そうですね。失敗することとか、失敗してもいい、失敗してもどうにかなるっていう子が多いですね。もともと3日校なので第一志望で入っているって子は全体の割合からすると多くなくて、夢やぶれてっていう子が多いので、その時点でももう一回失敗しています。でも、じゃあここからまた新しいスタート地点からやっていこうってことで、卒業するときは楽しい6年間だったって子が多いので、それは誇れるところかなって思いますね。

淡路

それは変わってほしくない部分ですね。先程ITの話がありましたけど、どんどん効率化が進むでしょうが。浅野は人と人の関係で、対面でのやりとりを重視してきました。人を大切にしてきました。教員にも働きやすい職場をつくるとか、生徒の居心地のいい環境をつくるとかね。これはもう代々の校長の努力もあって今日があるかなと思います。それを現在の校長も引き継いでくれている。それはありがたいことです。

ただ、社会が変わり子どもたちも変わってきていますから、若い先生たちも学びを続けていくこと、それが今後の浅野の課題じゃないかなと思います。古梶校長には、自分の気づいたことは思うようにやりなさいと、私応援団として声をかけているんです、止まっちゃいけないって！

古梶

あの課題は日々やっていると色々出てきますが簡単には行かないですね。先生方の勤務時間の問題にしても行事・部活動にしてもそうだし。

ただここ40年以上続いていたことをバーンと変えてしまったことが一つあって、本校は、総合学園祭といって、9月に文化祭と体育祭とって一緒にやっていたのですが、どうしても体育祭までの時間がなくて準備が間に合わなかったりしていたのです。でも今回コロナのなかで、密を避けるために中高合同で体育祭ができなかったのが、中高を分けてやったんですよ。そしたら生徒にしてみたら、6学年合同でやるよりも待ち時間少ないし、結構種目多いし、楽しかった、ということで、じゃあもう体育祭5月に移して、高校と中学で（日程を分けて）続けてやっ飛ばさおうというので変えちゃいました。

もしかしたら歴代先生も思っていたのかもしれませんが変えるときって思いきらないとできないかなって思っ

淡路

いや変えるべきことは、どんどん変えたらいいですよ！それをできる勇気を持つというのが、校長の役割ですから。

古梶

やってみたら生徒に好評で生徒が満足してくれるのが何よりで一番です。

淡路

そうです。生徒の満足が保護者の満足にもつながる。そうすると、多様化社会でも親のクレームも少なくなっていくと思います。クレームは多少はあってもしょうがない時代ですよ。

【質疑応答】

共学校 A先生

前半のところで生徒の様子を観察して情報共有してってのが心に響いた部分。具体的に生徒の観察をしていて、例えばここが成長したとかそういうところに気づくことで生徒の様子が変わったとか。

古梶

まだ6月でそんなに大きな変化ってないかなって思うんですけど、やっぱり学校の中の行事とか1年経ったあとで学年が落ち着いたってときに最初はチョロチョロしていたのがちょっと落ち着いてやるようになったとかっていう変化は、担任間で共有して

いて。あの一つはですね、担任はひとクラス持ちますけれど、本校の先生って一学年270いるんですけど6人で270人見ているって意識が強いんですよ。だから自分のクラス以外の生徒に対しても、ものすごく先生方がよく見ている。それが強みかなと思うんですよ。だから自分のクラスだけが良ければいいんじゃなくて学年全体見ている。クラス替えは毎年やっているので、次の年初めて対面する生徒っていうのもいて、そのときに、ああこの生徒こうだよっていうことをある程度把握し

てスタートしていけるって部分もあると思います。あとは4月の当初はどの先生も生徒と軽く面談をします。そういう中で、去年こうだったけどこうなったと比較して、生徒の成長を実感している部分が各々の先生方の中にあると思います。

淡路

やっぱり、先生方が気づいた情報をその日のうちに情報交換されているっていう環境があるのが大事ですね。講師の先生方からも生徒たちがよく話しかけてきますねっていわれるんですけど、やっぱり日常的に廊下での生徒の様子とかちょっとした会話とかに耳を傾け、観察しているからです。講師の先生にも、そういう姿勢でいるんだということを理解、協力してもらっている。こういう意識の環境づくりが重要なんじゃないですかね。

共学校 B先生

家庭学習をどう指導していくのかも大事なポイント。浅野ではどうしていますか？

古梶

主にその日の復習を含めた宿題が家庭学習になると思いますけれども、数学の授業のあとは復習が必ず、英語は予習とかこれ覚えて来てくださいっていうのがあって、それを短い時間で小テストして確認していく。そのへんはこうやって地道にチェックしていくしかないんじゃないかなと思います。

それであまりにも提出していない、やらない生徒は呼んで話す。場合によっては残してその場でやらせてかえすっていう。まあ強制的にやらせるしかないかなと。で中学の傷が浅いうちからやっておかないとやっぱり大変になるかな。って。高校生なんかこの子中1からやらせたほうが良いんじゃないのって生徒もいます。早い段階で徹底的に面倒見ていくしかないんじゃないかな。

淡路

神奈川の女子大付属中高の先生とよく話をしたんですけど、その学校は中学に入ると非常にきめ細かな指導で育てていて、高校に入学するとあなたの考えで生活しなさい、学習しなさいと。それまでは生活面と学習面で、徹底して学校が小学校で足りなかったものを含めて補うんですね。そうすると、中学校で苦しかったのに高校に入ったらなんでこんなに自由なのと格差に戸惑うそうです。ある時、その学校の卒業生と会って話したことがあるんですけど、起業家みたいな自律した女性で、そういう仲間（卒業生）が少なくないというんです。だからやっぱり古梶校長が言うように、入り口のところでの指導、特にどういう生徒かってことの把握ですね。小学生の子供の能力差というのは、特に男子は生活面から親にやらされている子供が多いのではないかと思っているんです。やらされているというのは、想像力や行動力は停止しがちですよ。そうすると与えられたことだけをやる中学生が入学してきちゃう。それは中間層に多いですよ。浅野は、中間層の子どもの入学者が多かったから、中間層のモチベーションを高める指導をして、今日まできたと言っても過言ではないと思います。前にも述べた人育ては促成栽培はできないということです。この間現場の

先生がやってきてくれたことは、一朝一夕にはできないことですよ。種を蒔いて育てていくこと、そういう環境をつくっていくんだと意識してやっていかないとできるものではないですよ。

古梶

そうですね。男の子は特にそうなんですけど、ゲーム感覚で、できるから楽しいっていうルーティーンに入れてあげちゃうと良いのかなって思います。ただもうやだなって思っちゃうと男の子の特性としてもうやんなくなっちゃうんで、それが多分男の子と女の子の差なのかなって思いますね。それから良いスパイラルに入れてあげる。そのためには自信をつけさせてあげるってのがすごく大事なんじゃないかな。

淡路

そうですね。ただ、根性とか、気合ではなく、楽しく努力できるコミュニケーションによって自信をもたせることですね。特に、入学してくるときにメンタル面で弱さを味わっちゃってますからね。

古梶

あの入学式でよく言うんですけど、今日からスタートなのでまた新しい自分の目標に向かって頑張っていきましょうって。まだどうにでもなれるよ。君たちの人生まだまだこれからだよっていうのは、最初に伝えてあげて。まだどんな自分にもなれるよ。であとは、具体的に勉強ってこういうふうにするんだよって、やり方をただ、やれっていうんじゃなくて、具体的にこういうふうにするんだよって、勉強をするってことなんだよっていうのをちゃんと伝えてあげることかなって思いますね。

淡路

そうですね。最近はわかりませんが、従来、私たちの学校に入学してきた生徒というのはやはりモチベーションが低いし、そのモチベーションの低さと同時に、どうしたら良いのかということが、親に指示されてやってきているからうまく身についていない。そういう生徒が多かったんです。

古梶

あと入学時の成績と中学3年のときの成績って実はあんまり関係ないんですよ。だけど中学1年の2学期の終わりくらいとの中3の最後の成績ってものすごく相関があるんですよ。だからやっぱり、預かった生徒に対していかに学校のこと信頼してもらって先生のこと信頼してもらって、先生のいったことをきちんと守って勉強を始めていけることが大事なのかなと。だからそれにはただやれっていうだけじゃなくて、こういうふうにするんだよって、ノートはこうやるんだよと。ある程度できる子だと、解き方を覚えてそれで終わりってなっちゃう。でもそうじゃなくて、なんでそれで解けるようになるのかって部分もきちんと伝えてあげることが大事なんです。だから入ってこれから半年の過ごし方でこれからの6年が決まるよってことも言って良いんじゃないかな。それくら

い中学の最初の半年大事。もっと言うと5月の終わりの中間試験というのは彼らの学校のなかの生活をどう作っていくかってことの根本になってくると思うので、朝ちゃんと遅刻しないで来て、授業受けて、帰ってちゃんと復習宿題やって、ちゃんと寝て、また学校に来るっていうことを1カ月半できちんと身につけるっていうことがすごく大事です。

淡路

ぜひ、そういう指導を継続してください。それが教員の大事な仕事ですから。

古梶

本校は部活動も5月の終わりまで入れないんですよ。中1は。それは要は、1カ月半のうちに生活習慣をきちっと身につけて、その上に部活動をかぶせていくっていう発想なんです。最初にまず生活をしっかりしてから、その上で負荷をかけていくって形にしています。

淡路

そうですね。私が最初に中1を持ったときに、7月から楽しいクラブ活動が始まる。そしたら「勉強の時間がなくなってくる。だから今のうちに時間の使い方を考えて」という指導をしたら生徒が、休み時間になっても遊んでいなかったですね。そういう関わり方を学年で、学校全体で発信していくということが大事なことだったと、今振り返っています。

※古梶先生から追加でクラス編成の話——————バックヤード

古梶

選抜クラスの話。今の小学校6年生から、中学3年までは選抜クラスを廃止します。もともと40年くらい前にできたシステムなんですけど、当時の校長が進学実績上げるために入れたってのはもちろんあるんですけど、ゆくゆくは全クラスが英数になってなくなればいいってしていました。おかげさまで優秀な生徒が集まるようになったので、中学3年間くらいは切磋琢磨させたほうが良いんじゃないのかってことでなくなりました。ただ中3からは、やっぱり英数は高校の内容がはいってくるので、そこはいいいに見てあげようねっということで、英語6時間数学6時間ありますけど、その半分の3時間はじゃあ分級授業やりましょうってことで、学校を今工事して分級教室作っています。数学だけ先行してやっています。

淡路

でも先生英数クラスというのは実質的には2クラスくらいの質の高い生徒が育ったよね。英数クラスは、制度的には1クラスですが、生徒の力としては2クラス位の数がいて、その時、制度の役割は果たしたなと思いました。

古梶

2クラスかどうかわかんないのですが、効果はあって、実は英数クラスのできる前の10年間は、東大合格者は1, 2, 3人くらいの世界だったんです。最初は、中2から高2まで作っていて、その翌年には、もう東大合格者人数は増えてきてるんですよ。2年目には4人になっています。ただ10人超えるまでにはこのシステムができてから9年かかっているんです。2月3日入試で入学した生徒達が卒業する初年度のときには初めて東大合格者が20人を越えてるんですよ。それが1992年なんですけど、そこから現在に至るまで20人切ったことって1回しかないんですよ。やっぱり英数クラスって一定の役割を果たしてたのかなって思います。

淡路

それに、受験生もやっぱり一定の受験生の数を確保しないといけないってことだね。磨けば輝く神大がいっぱいいるのだから、校長の力、教員みんなの力ですね。

古梶

あとはどの科目もきちっとやらせるって大事なことで、特に中学2年生あたりで実技系の科目もきちっとやらせないといけないと考えています。ともすると英語と数学だけ勉強していればいいって話になっちゃって、他の科目をやらないのは本末転倒で長い目で観るとやっぱり良くないので、このところは気をつけないと、と思います。君たちに必要のない科目ってないんだよっていつてます。その中で自分たちの可能性とかに繋がる部分もあるんでね。

洗濯炊事ボタン付けはできないとね。社会人になったら。生きてく力ってだいじだね。ということも生徒のは折を見て話をします。

グローバル教育の一環で、成田空港で出国待ちの外国人にインタビューするって企画があったんですよ。一緒について行ったことがあって。外国人は、生徒が制服着ていて、珍しさもあって、インタビューに気さくに応えてくれるんです。その御礼に千羽鶴渡すんですけどその折り方がわからないって生徒がいるんですよ。やっぱり、鶴くらいササッと折れないとなあと感じるわけです。そういうことも長一目で見たら大事なんじゃないかな。こんなこともあるんで「鶴くらい折れるようにして入学してきてくださいよ」って言うことあるんですけど。

淡路

今日はグローバル教育の話が出てないけど、浅野は語学教育だけじゃないでしょう。

古梶

本校のグローバルは語学教育ではないので。異文化理解と相手の意見を聞いて自分なりに考えて自分で伝えるってことの2つ。日本語でも難しいが外国語だともっと難しい。って。その2つがグローバル。語学教育だけとは考えていません。

淡路

そう！すばらしい。金のかからないグローバル教育をやるればいい。コロナ禍で、今は海外研修も止まっているから、日本の生徒は英語で話すと言っても、日本語で話す内容を持っていない生徒が多いんだから。英語のディベートじゃなくて日本語でディベートしたのを英語にふきかえという指導を学校の新聞で見かけて、良い指導だなと思った。

古梶

というわけで本校はグローバルが語学教育じゃないって思っているの。これもまたチャレンジの場所で、失敗したらまた考えて言い直すとか、コミュニケーション取り直すってことなので、校訓の九転十起の実践の場だなんて思っています。

淡路

高度経済成長期に1年間留学する生徒がいたけど、帰ってくる生徒が、「英語よりも話す中身が足りない」と言って帰ってきた。だから、自分をもっと広く勉強しなければと言ってモチベーションを高めて、トップクラスに上がっていったね。そういうことを古梶校長が踏まえて継続してくれているから感謝です。

古梶

エンパワーメントプログラムなんかでも、日本じゃない国の人の文化について話してもらおうとすごく琴線に触れるみたいです。インドの人、アフガニスタンの人。そういうのがほんとに彼らは楽しいですね。

淡路

早稲田大学などは、8000人の留学生が外国から来ているらしいね。だから異文化交流したいなら早稲田大学へ行けば良いんだよね。必ずしも外国へ行かなくても勉強できる。金のかからないグローバル学習もある。大事だけれど流行に振り回されないようにしてください。浅野独自の古梶流を出して頑張ってください。